

というてよからう。これによつて見ると本邦における鉄鋼に関する研究開発は、大正時代に芽を發し、昭和に入りて次第に成長し、終戦当時一時衰退したが、戦後急速に發展し、今日の盛況に達したことが知られる。今や科

学技術水準においても、また鉄鋼生産額においても、英独等の先進国を凌駕するに至つたことは、まことにご同慶の至りであつて、その推進機関として日本鉄鋼協会の功績偉大なるを痛感する次第である。

(名誉会員・元東北支部長)

日本鉄鋼協会 50 年の思い出

児 玉 晋 匡

近頃医学の進歩發達によつて、人生僅か 50 年が 15 年近くも延びたと言われるが、50 年と言えば誠に長い歲月である。私が高等学校時代、担任教師から今後發達する学問は冶金学であると聞かされ、何のこともなく冶金学科に入ろうと決めたのである。大学一学年の時足尾銅山に実習にやられ、次の年は釜石製鉄所に行つた。当時釜石には鉄道もなく遠野という町から峠を越して行つたものである。足尾銅山の硫黄臭さに驚かされ、今度は釜石の交通不便の山奥に失望させられたものである。当時の釜石製鉄所は、15 t の満俺鉄炉と 20 t 許りの溶鋳炉、それに 15 t の平炉とであつた。溶鋳炉から真赤に熔けた銑鉄が噴出し、平炉からは水の如くに火花を散らして取鍋に流れ込む男性的な光景に勇心勃然と湧くのを覚えた。こうした鉄や鋼は輕軌条となり、鑄鉄管となつてゆくのである。鉄というものにこんな深い印象を受けて帰校すると殆んど同時に、普通冶金から新たに鉄冶金が分離す

ることとなつたので、私はたちどころに鉄冶金専攻と決めた。丁度その頃“日本鉄鋼協会”というものが創立されて、俵先生に勧められて入会した。英国の有名な The Iron and Steel Institute なんてことは勿論知られなかつた。鉄冶金の分離、私の鉄冶金科入学、そうして日本鉄鋼協会の創立は殆んど全く同時といつてよい程だ。その日本鉄鋼協会が誕生 50 年となると聞く、私の鉄の生命も 50 年となるわけだ。熔鋳炉の能力が 1 日 2000 t となり、わが国鉄鋼生産力が世界第 3 位となる、全く夢のようだ。こうしたことはわが国製鉄事業の消長とともに日本鉄鋼協会の努力を物語るもので誠に感慨無量なるものがある。只当時の諸先輩特に創立者の俵先生の他界されたことが遺憾の極みである。日本鉄鋼協会がわが製鉄産業の限りなき将来の發達を見守りながら、永遠にその栄光と發展を続けられんことを祈りつつ思い出の稿を終る。

(元評議員)

わが国転炉製鋼の回顧

斎 藤 三 三

このごろ、はからず筐底永く埋もれていた転炉吹製銑鉄諸成分の变化曲線図を見つけた。官営八幡製鉄所半世紀前の B 鋼 22638 番 (軌条材—B はベセマー) と B 鋼 22740 番 (軟鋼) のそれであつた。学窓を出て八幡に転炉工を拝命し、酸性 10 t 転炉の短くチビタ蓮根羽口の差替えの炉前現場で、灼熱した炉底の内から噴き出す不意の焰突に幾度か焦した眉毛の臭い匂がまだ鼻毛をむずがらせる。われらが日本鉄鋼協会の回顧については、これが執筆に極めて相応しい方々が多士済々なので、私は協会の眼目たる鉄鋼技術の研究と開発とに直結した裁断面即ちわが国転炉製鋼の推移—ベセマー、トーマスそして純酸素製鋼の梗概につき記述を試み責をふさぐこととした。

官営八幡製鉄所に酸性転炉 10 t 2 基が建設され、わが

国に初めてベセマーの吹錬が開始されたのは明治 34 年 (1901) 年の秋であつた。これは当時のわが国銑鋼一貫工場の粹、近代化製鉄八幡へのいわば導入技術のシンボルであつて、その多産性へ賭けた八幡製鉄所当事者の期待が小さいものでなかつたことは推測に難くない。それにも拘らず、開始後の作業は容易でなく、吹製日に漸く 1 回に過ぎない場面も少なくなかつた。従つて生産の起伏不常を免るることを得なかつた。後漸く作業上の障礙を克服して操業の正常化を保持し得るに至り、吹錬開始後あまり時を経ずして 1 年半余におよぶ吹製の休止を除いて、前後 25 年に亘つて連綿稼動を続け、総 t 数 273 万の鋼生産の成果を挙げ、明治・大正に亘るわが国鉄鋼業の揺籃期における需給に対し、寄与するところ少ししなかつた。然るに昭和 2 年 (1927) の 11 月に至り、2 基の